

さあバスに乗りおくれないように…

\* 国民年金に加入しなければならない人は、  
20才以上50才未満で、賃給や年金などの制度に入っていない人たちです。



10月1日から届出開始

かけてよかつた国民年金  
ちいてわかつたよい制度



こんな人は保険料が  
免除されます



「君は気安くいうけれども、これを、  
年金が入ったから  
温ゆる箱に  
みになつた  
年金の  
おかげで  
毎日が楽しく  
行きましよう」

「それはそうだろうね。」

安定した運営が大切

「君は気安くいうけれども、これを、  
年金が入ったから  
温ゆる箱に  
みになつた  
年金の  
おかげで  
毎日が楽しく  
行きましよう」

「いや、われわれとしてはそれほど気

にはしてないよ。これだけ画期的な制

度が新しく発足するのだから、ある程度

の考え方の相違は当然出てくるだろうと

思うし、また、制度の内容がだんだんわ

かってくれば、大多数の人たちはこれを

自分たちのものとして、支持してくれる

ものと思っているよ。」

「ところでその内容だがね。大体のし

くみは話を聞いたり刷りものをみたりし

てるのでおおよそわかつてているから、

今度はひとつ、反対ののろしをあげてい

る人たちが、問題にしているような点を

中心にして、話をしてくれないかね。」

「そうだね。問題は大きくまとめて四

「現在の福祉年金の支給範囲を拡大せ  
よ」という要望が非常に強いんだ。これ  
はね。たとえば、障害年金の範囲に内科  
的疾患による身体障害を含めよ、とか、  
世帯にも母子年金を支給せよとか、所得  
制限がきびし過ぎるからもつと緩和せよ  
というような要望なんだね。」

「いずれも、もつともな要望じやない  
か。」

「だからそういうことを考慮にいれて  
いくとすれば、さきほどの三千二百億円  
とか、四千七百億円とかいう額はもつと  
ふくれるわけだ。」

「それはそうだろうね。」

「なるほど、考えられることだね。」

「そういうことでは、せつかくの年金  
子孫の税負担は大変なことになるよ。少  
くとも、掛け金なしの年金を、全国民  
に、しかも人に頼らないでくらしてゆけ  
るだけのものを支給せよということを、  
現在の社会のしくみの中で実現しようと  
する場合、果して国家財政がこれに堪え  
得るかという問題があるわけだ。」

「しかし、それは政治の問題だから、  
やろうと思えばできないことではないだ  
ろう。」

「かりにできるとしてもだよ、もしも  
ある年に大災害があつて、災害復旧にば  
く大きな金がかゝるというようなことが起  
つたり、経済界の不況で税金がおさまら  
ない、というようなことが起れば、國の  
財政は年金を出す余裕がなくなつて、支  
給額をへらさなければならないというよ

「われわれは誰でも何時かは年より  
なつて生活費を稼げなくな  
るときがある。そのときの  
ために、元気なうちに自力  
でできるだけの準備をして  
おくことは、われわれの生  
活態度として当然のことだ  
ろう。それを、全社会的な  
ひろがりで、組織的に行な  
おう、というのが拠出制の  
ねらいであり、また、さき  
ほどの財政的な理由と共に、  
拠出制が採用された理  
由であるわけだ。」

「おみそれしました。ハハ……」

「ハハハ……ぢやあ、来月号で又  
逢おう。」

（国民年金課）

（15）

論議される四つの問題点

凸「十月からよいよ拠出制の適用事務  
がはじまる。そだが、新聞などによると  
いろいろ反対の動きもあるようだ。国民  
年金の前途も多難というところのようだ  
ね。」

「いや、われわれとしてはそれほど気

にはしてないよ。これだけ画期的な制

度が新しく発足するのだから、ある程度

の考え方の相違は当然出てくるだろうと

思うし、また、制度の内容がだんだんわ

かってくれば、大多数の人たちはこれを

自分たちのものとして、支持してくれる

ものと思っているよ。」

「ところでその内容だがね。大体のし

くみは話を聞いたり刷りものをみたりし

てるのでおおよそわかつてているから、

今度はひとつ、反対ののろしをあげてい

る人たちが、問題にしているような点を

中心にして、話をしてくれないかね。」

「そうだね。問題は大きくまとめて四

「第三は、ぼう大な額の保険料積立金  
ができるというが、その運用をどうしよ  
うとしているかということ。そして最後  
に、四十年かけつづけて月に三千五百円  
相当の年金をくれるというが、そんな遠  
い先の金の値打ちはどうなるか分らぬじ  
やないかということ。大体こんなことが  
一般的に論議されているようだ。」

「掛金なしてやれないか？」

「なる程。人の考えることは似たりよ

うなことも起きかねないよ。」

「なるほど、考えられることだね。」

「そういうことでは、せつかくの年金  
制度が、不安定な、頼りにならないもの  
になつてしまふね。年金制度にとって一  
番大切なことは、年金財政が、国の一  
般会計から独立して、どんな財政需要の  
変動があろうと、それに影響されないで  
安定した姿で運営できるということだろ  
うと思うね。」

「大体わかつてきたよ。すると結局、  
拠出制というのは、自分が将来もらうべ  
き年金を、毎月少しづつ保険料を払つと  
いう形で積み立て、ゆこうというわけな  
んだね。」

「そうだ。少しうるさいが数字をあげ  
てください。」

「それに政府が保険料の二分の一に相  
当する額を一般会計から支出して、それ  
もあわせて積み立て、これを特別会計に  
して、安全且つ有利に運用していく、  
その運用利子もまた年金支給の財源にま  
わそう、というやり方なんだ。」

「わかつたよ。要するに、掛け金なし  
では国の財政がたまらんから、ある程度  
の掛け金をとつてゆこう、と、こういう  
わけだね。」

「そう結論を急ぐなよ。そのことは確  
かに拠出制が採用された重大な理由には  
ちがいないが、それだけがすべてではな  
いね。」

「と、いうと？」

「知らぬ間に自分で保障した老後」

「おみそれました。ハハ……」

「ハハハ……ぢやあ、来月号で又  
逢おう。」

（国民年金課）

（14）

凸「向答」

金水年こ國あ

（その1）

つたりだね。実は俺も同じ疑問をもつて  
いたんだ。それでは第一の問題から解明  
してもらいたい。この間から支給がはじ  
まっている福祉年金は掛金なしでくれる  
わけだろう。あ、いうやり方をひろげて  
ゆけないのかね。」

「現在の福祉年金の場合、國の財政負  
担は平年度で約三百億円という見込みだ  
から、ある程度まではもつと巾をひろげ  
ることができるかも知れないね。」

「しかだよ、現在老人一人が、月にい  
くらあれば何とか不自由を忍んでくらし  
てゆけるかを考えてみると、ごく常識的  
にいつ三千円は必要だろう。」

そこでだ、現在の福祉年金の一ヶ月あ  
たり千円を三千円に引きあげることにす  
れば、年間九百億円の財源がいるわけだ  
ね。また、福祉年金は七十才から支給す  
ることになっているが、それではおそ過  
ぎるから六十五才からにしようというこ  
とにれば、約千八百億円が必要だとい  
う計算になるんだ。」

「大した額じやないね。」

「そう簡単に云うなよ。もつと先を聞  
いてくれ。」

「今度は人口構成の問題だ。人口の老  
化現象という言葉を聞いたことがある  
だろう。」

「年よりの寿命が伸びて、全人口の中  
で年よりの数が段々増えてゆくというこ  
とだろう。」

「そうだ。少しうるさいが数字をあげ  
てください。」

「そうなんだ。このことは見方を変え  
ると、現在では、十五才から五十九才まで  
四十年後には四・七人で一人をさらには  
人一人を養つている形になつていて、  
四十年後には七・五人で一人を養わなければ  
ならないということになるわけだ。」

「なるほど、若い者がうんと稼がなければ  
いけないが年よりは檜山に行  
かねばならない、ということになるの  
か。」

「オートメイションとか何とか、いろ  
いろ生産力を高める工夫が進んでゆくか  
ら、それほど悲観したものでもないさ。  
しかし、とにかく年よりはふえるわ  
けだ。年よりの数がふえれば、さきほどの  
千八百億円は、二十五年後には三千二百  
億円をこえ、四十年後には、四千七百億  
円をこえるという計算になるよ。しかも  
この額はさらに別の理由でもつともつ  
とふえることになるよ。」

「まだあるのか、それはどういうこと  
だ。」

「そうなんだ。このことは見方を変え  
てみよう。六十五才以上の老人は、現在  
でも五百三十万人をこえているんだよ。  
それが、二十五年後には九百五十万人。  
四十年後には四千四百万人と大巾にふえて  
ゆく見込みなんだ。」

「大へんな数だね。」